

経済学と共産主義

中野 雄 策

<まえがき>

カール・マルクスの思想・学説が、(1)全自然の唯物論的解釈、(2)経済学批判体系、(3)科学的共産主義、の3成分からなる一大体系であるだけでなく、3つの成分が相互に根拠づけあう不可分の有機的一体性をもつということは、その当否はともかく、事実としてはなにびとも否定しえないところである。宇野弘蔵氏は、マルクスにおける思想と学問のこの一体性そのものに疑問を提起し、経済学の問題領域でのマルクスの業績だけを「科学たりうるもの」として分離し、これを純粹論理の自己完結的体系に仕上げようとする。科学的共産主義の「科学性」をみずから学問的にたしかめる点で怠慢にすぎたわが国のマルクス研究家にたいして、氏の問題提起はふかい反省をせまるものではあった。しかしながら、全自然認識の世界観的拠点としての唯物論と弁証法を前提しないで構成された価値・剰余価値学説などというものがいったいありうるのだろうか？あるいは、共産主義的帰結をもたない資本主義経済学とか、このような経済学によって根拠づけられた唯物史観とか、したがって共産主義的帰結をもたない唯物史観とかが、いったい成立可能なものなのだろうか？「資本論」の学問的構成が、宇野氏の根本的疑問を容易にうけつけるほどすき間だらけだとは、とうていかんがえられないのである。「社会主義と経済学」¹⁾ いらいの宇野氏の問題提起にたいする批評としては、梅本克己氏によってほぼつくされているようにおもわれるが¹⁾、なおここで私なりに「経済学」と「共産主義」との関連の問題に限定して考えてみたい。

1. 宇野氏による「経済学」と「共産主義」との分断

「資本論」第1巻24章最終節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」におけるマルクスの叙述にたいする宇野氏の独

1) 宇野弘蔵「社会主義と経済学」, 思想, 岩波書店, 1965年, 9号。これにたいする梅本氏の批判と宇野氏の反批判をうかがう文献として、つぎのものをあげておく。(1) 宇野・梅本, 対談「社会科学と弁証法」, 同, 1966年, 1, 2号 (2) 梅本克己「労働力商品の特殊性」同, 1968年, 5号 (3) 同, 「搾取の論理と収奪の論理」, 同, 9号 (4) 宇野, 「資本制生産の基本的矛盾とその解決」, 同, 11号 (5) 梅本「商品としての労働力とその矛盾」, 同, 1970年, 7号

特の解釈と批判のうち、ここで問題とする点は、つぎの2つの引用によってつくされる。

「経済学の確立は唯物史観を科学的に基礎づけるものと私も思うのであるが、しかしそれは、マルクスがこの節でやっているように、社会の変革の過程自身を原理的に展開するということによってではない。そういう企ては、マルクスをもってしても成功するものではない。そればかりではない。経済学の原理論の展開自身にも障害をなすことになる。経済学にしても、原理となれば、それは永久に繰り返すものとして説くよりほかに方法はない。この原理を否定する新しい原理もその原理そのものから展開するわけにはゆかない²⁾」。

「元々、社会革命は、資本主義社会で発展した生産力と生産関係との矛盾を解決するものとして出現するものに相違ないが、しかしそれはその矛盾を根本的に解決するものとして、その矛盾の発現の根拠そのものを解消することを目的とする運動によって始めて実現されるのである。それは恐慌現象のようにいわば単なる経済的行動によって実現されるものではない。経済過程の資本主義としての特殊歴史的形態を廃棄するという、むしろ経済過程の外から加えられる政治的行動によって実現されるのであって、恐慌現象のように経済学の原理でその必然性を明らかにされるというものではないのである³⁾」。

この2つの引用のうちには、マルクスの叙述内容にたいする単純な誤解がある。問題とすべき第1点は、宇野氏は、「収奪の収奪」ないし「否定の否定」として要約された「歴史的傾向」の論理そのものによってなにか「革命の必然性」がのべられているかのように断定していることである。「この節でやっているように、社会の変革の過程自身を……云々……」⁴⁾(宇野)という文句は、それ以外にはとれない。氏自身がわざわざ引用しているように、マルクスはこの節の叙述についてつぎのように注釈している。「ここでこのために何等の証明もしていないのは、まさにこの主張自身が、すでに資本主義的生産についての諸章において与えられた、長い展開の総

2), 3), 4), 前掲, 宇野「社会主義と経済学」, 9~10ページ。

括的要約にほかならないという理由によるのである⁵⁾。すなわち、たとえ宇野氏の断定するようにマルクスが資本主義経済の原理的研究において「社会主義革命の必然性の論証」というやらずもがなのことをやったとしても、それはこの短い1節においてのみおこなわれたのではなく、主としてこの1節でおこなわれたのではない。この種の論証は(もしそれがあるとすれば)、すくなくとも「資本論」第1巻の叙述全体をあげてなされている、と解すべきであろう。第2の問題点は、宇野氏がここで要約された「社会革命」をすぐさま説明ぬきで「政治革命」におきかえ、「革命の必然性」をごくせまい意味における「政治的変革の必然性」として限定してしまう点である。このことは、氏が「恐慌の必然性」や「戦争の必然性」と対比しつつ「革命の必然性」を問題とするばあいには、たとえば「経済的過程の外から加えられる政治的行動」⁶⁾とか「政治活動の重要な任務」⁷⁾とかの問題にたちまちすりかえてしまうことからあきらかである。科学的社会主義にたいする宇野氏の理解のうちでは、社会変革の客観的・自然史的過程と主体的・意識的過程との相互関係という問題が欠落しているものとおもわれる。

2. 資本主義的生産における自己再生産的循環と自己否定的発展——第1点について

マルクスにおける思想と学説の不可分の一体性は、この思想・学説の発生の端初においてすでに明白であった。フォイエルバハ的人間主義の臍帯をのこしている「経哲手稿」においてすでにマルクスは、歴史の唯物論的解釈から生ずる論理必然的帰結としての「共産主義」の原理的構想をしめすことができたし、そのためにこそ「市民社会解剖」のただひとつの科学であるブルジョア的政治経済学の諸範疇の批判を意図した、ということができる。その結果、マルクスは、一方において、なにびとも否定しがたい経験的事実としての「疎外された労働」の分析をつうじて、ブルジョア社会の諸関係を人間にとっての根源(すなわち諸個人の現実的活動)に帰着させるとともに、他方においては、歴史の全成果を感性的に体現している私有財産の「積極的揚棄」が、さしあたりは「自己自身に発する真実の肯定」⁸⁾ではないとしても、すくなくとも「否定の否定としての肯定」⁹⁾であり「人間的解放のための必然的契機」¹⁰⁾であることを確認することに

よって、「歴史のいっさいの運動は共産主義を現実に産出する行為——その経験的ありかたを分娩する行為である」¹¹⁾という歴史観を確立することができたのである。

たしかに、この歴史観がたんなる歴史観にとどまるならば、哲学的科学ではあっても、実在的对象にかんする経験的科学的ではないであろう。それは、およそ社会認識を科学化するための前提をなすものではあっても、物質の特殊な運動形態の思惟における反映という意味での科学ではない。いっさいの学問的認識は、第1に、伝来の科学によって獲得された諸範疇の批判的継承によるのみ前進できるし、第2に、この批判的継承は既存の諸範疇を感性的に確認しうる経験的事実との対比によるのみ可能である。そして、社会認識の分野では、ブルジョア的政治経済学によって礎石をすえられた労働価値説だけが、科学を科学たらしめる世界観的拠点=唯物論のうえで批判的継承に値する諸範疇をマルクスの前に提示していたのである。「経済学批判」への道は、唯物論的歴史観そのものによって否応なしに指示された道であった。

マルクスは、資本分析の前提としての商品分析においてすでに、ブルジョア社会を人類史的発展の大きな流れのなかにつきはなして把握している(第1章4節)。しかしながら、ここではまだブルジョア社会のいっさいを支配する経済力=資本が欠けており、したがってブルジョア社会の肯定も否定も問題とはなりえない。マルクスは、たとえば、「社会的生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿態は、それが自由に社会化された人間の所産として人間の意識的・計画的制御のもとにたつとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎすてるのである¹²⁾」とのべているが、なぜ、どのようにして、このヴェールがはがされるか、という問題にはふれていない。「そのためには、社会の物質的基礎または一連の物質的存在条件を必要とし、この条件そのものがまたひとつの長い苦悩にみちた発展史の自然発生的所産である¹³⁾」、という理由によるのである。いうまでもなく、ブルジョア社会を克服するための物質的前提ないし条件は、資本主義的生産過程の分析において明示され、この前提ないし条件を生みだす「長い苦悩にみちた発展史」は「いわゆる本源的蓄積」にかんする章において補足的に叙述された。注目すべきは、ここで予示されている資本分析の視点であり、

8) 「経済学・哲学手稿」, マルクス『経済学・哲学論集』, 河出書房, 136~152ページ。

9)~11) 同上ページを参照。

12) 『資本論』, 全集, 大月書店, 23巻, 106ページ。

13) 同上ページを参照

5) マルクス, 「アチューチェストヴェンヌィエ・ザピースキ」編集部への手紙(1877年11月), 全集, 19巻, 大月書店, 116ページ。

6) 前掲, 宇野論文, 10ページ。7) 注1)の(1)を参照。

それがもつ方法論上の意義である。マルクスにとっては、資本の「純粹理論」を構築することが自己目的ではなかったということ、このことは、商品分析においてすでに指示されているのである。ブルジョア社会に内在し、かつ「意識的・計画的に制御された社会」の物質的基礎たりうるものを明示すること、これが資本分析の目的なのである。「貨幣の資本への転化」にはじまり「資本蓄積の一般法則」におわる直接的生産過程の経済学的研究をつうじて首尾一貫追求されているのは、ブルジョア社会体制の物質的基体をなす特殊歴史的な生産有機体の生理学であり、したがって第1に、自己自身を有機体として存立せしめている運動の諸形態、第2に、この形態にふくまれ、かつ不断の形態変化をよびおこす成長と発展の論理、を析出することである。この2つの分析視点は、たがいに結合し補足しあって、不断に変化し発展する歴史的対象を認識するための「科学的にただしい」¹⁴⁾方法となるものである。すなわち、資本の自己再生産的循環構造に内在する質的变化の契機をこの循環構造の論理にもとづいて明示しえたときにはじめて、発展的移行の必然性が科学的に根拠づけられた、とみなすことができる。

資本分析の白眉ともいえる13章「機械と大工業」(このひとつの章だけで「資本論」第1巻の5分の1、生産過程分析の4分の1があてられた)をとりあげてみよう。マルクスがこの章で直接解明しようとしているのは、資本と賃労働との階級関係が価値法則にもとづいて自己自身を再生産する諸形態のうちもっとも大がかりで活力にみちた形態である。資本は、機械制大工業というまったくあたらしい生産様式において剰余労働時間の自然的制限をとりのぞくことによって、婦人や児童の大群を搾取材料にくわえることによって、資本と賃労働との階級関係の自己再生産構造を維持し、強化し、拡大する。しかし、この生産様式のもついっさいの力を相対的剰余価値搾出の固有の方法に転化するかにみえる資本の運動そのものが、他面においては生産過程を直接社会化された集団的生産へと転化し、それによって「全面的人間を生みだすための唯一の方法」¹⁵⁾としての「未来の教育」¹⁶⁾を発芽させたり、「社会がその生産過程の自然発生的姿態にくわえた……最初の意識的・計画的反作用」¹⁷⁾としての「工場立法」¹⁸⁾を生みおとしたりもするのである。マルクスにとって「大工業の原理」¹⁹⁾とは、なにか「永久に繰り返すもの」(宇野)ではなく、むしろ逆に現存の生産形態をけって「最終的なものとは見ないし、その

14) 「経済学批判(序説)」, 同, 13巻, 627ページ。

ようなものとして取り扱わない」²⁰⁾革命的原理であり、自己自身の原理のうちに「変革過程の要因」²¹⁾＝「変革の酵素」²²⁾を秘め、その発展過程のうちに「新社会の形成要素と旧社会の変革契機とを成熟させる」²³⁾ものであった。

資本の蓄積過程が同時に資本主義的生産に内在するこうした矛盾の蓄積と拡大再生産であるとすれば、そこから生ずる論理的帰結は、資本主義的生産の自己止揚がいかなにもものでもない。「資本主義的蓄積の歴史的傾向」として要約されたものは、この帰結を「歴史の論理」のなかで総括的にいいかえたものにすぎない。なるほど、「原理を否定する原理を原理そのものから展開するわけにはいかない」²⁴⁾(宇野)かもしれない。しかしながら、すでにみたように、大工業の原理、したがって大工業を固有の存立基盤とする資本の原理そのものがすでに自己否定的契機をふくむのであるから、宇野氏の疑問はこのばあい「的はずれ」といわなければならない。「原理」がもし運動し発展するものの「原理」であるならば、この「原理」は、運動と発展の動因をこそつかまなければならないし、「調和」ではなく「矛盾」こそが歴史的に変化する対象の「原理」とされなければならない。

資本主義的生産の循環と発展の全過程をはじめからおわりまで貫徹することによって「資本」そのものの存在の根拠をなす諸矛盾を、マルクスはつぎのように総括的に定義している。「資本が一般的な社会的な力として形成されてゆくというそのような社会的な力と、この社会的な生産条件を支配する個々の資本家の私的な力とのあいだの矛盾」²⁵⁾。資本主義的蓄積の歴史的傾向の基底をなすもの、すなわち、「労働過程の協業的形態、科学の意識的な技術的応用、土地の計画的利用、……世界市場の網の中への世界諸国民の組み入れ」²⁶⁾、要するに「生産諸条件を一般的な共同の社会的な生産条件につくりあげてゆく」²⁷⁾傾向と「資本独占」²⁸⁾とのあいだに、どのような「調和」がありうるのか? 「資本主義的私有は…私有制自身の完成をなすものとしなければならない」²⁹⁾(宇野)と主張することは、「資本主義的所有は完全になればなるほど、自分自身にふさわしくない基礎のうえにおかれる」ということをみとめるにひとしい。「事実上すでに社会的生産経営にもとづいている」³⁰⁾資本主義的

15) 『資本論』, 同, 23巻, 626～654ページ。

16)～23) 同上ページを参照。24) 前掲, 宇野論文を参照。

25) 『資本論』, 同, 25巻, 331～333ページ。

26) 同, 23巻, 995ページ。

27), 31), 32) 同 25巻, 331～333ページを参照。

生産様式の発展が瞬時もやすむことなく「私的所有と私的労働を廃棄」³¹⁾してゆくとすれば、そしてこの過程を論理的結末までたどるならば、「(資本主義的)関係そのものの解消をふくむ」³²⁾「ある1点に到達する」³³⁾ことはまちがいないし、あまつさえ、この客観的自然史的過程のなかにはきわめて重要な要素として「たえず膨脹しながら資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗」³⁴⁾もまたふくまれているのである。「収奪者の収奪」³⁵⁾そのものが、意欲された結果ではなくして、なにびともおしとどめることのできない自然史的過程なのである。

3. 「社会革命」の客観的・自然史的過程と主体的・意識的過程——第2点について

1844年いらいのマルクスの学問的営為は、つねに、共産主義的帰結をふくむ唯物論的歴史観の枠内にとどまり、一方でこの枠組を認識上・方法上の拠点としつつ、他方ではこの枠組自身を経験科学の領域で根拠づけようとするところみいがいのなにもものでもなかった。「資本論」のこうした枠組は、「原理論の展開自身にも障害をなすことになる」³⁶⁾(宇野)どころか、原理論としての「資本論」の不可欠の契機、学問的存立の根拠なのである。とすれば、経済学的研究の枠内でプロレタリアートによる政治革命の必然性(マルクスの言葉を用いれば「民衆による少数の横奪者の収奪」³⁷⁾)がかたられたとしても奇異なことではないし、ましてこの必然性を根本において規定している物質的諸条件を分析することは当然のことだといえる。問題は、社会体制の革命的変革という歴史の総体的過程のうち経済学的研究の対象たりうるのは、まずもって人間の主観的意欲や意識的行動から独立に発展する客観的・自然史的過程だけである、という点にある。もし、ブルジョア社会体制の共産主義的変革の必然性を正面きって問題にするのであれば、この必然性を根底において規定している客観的・自然史的過程だけでなく、この過程がどのような人間(あるいは人間集団)の、どのような行動によって実現されるのかが問われなければならないし、それだけでなく、政治的変革の必然性の意識そのものも、すなわち革命過程の社会的・文化的・精神的等々の諸側面にも照明をあてなければならないことになり、問題を直接上部構造の分野にまでおしひろげることになる。マルクスが、プロレタリア革命の唯一の事例(パリ・コミューン)の総体分析のなかからどのよう

な科学的結論をひきだしたかを、われわれは知っている。しかし、どのような天才も、材料のないところではなにも認識できないのであって、共産主義的変革にかんする多少とも体系だった科学的認識は、1917年いごの成功した革命の経験をもとめてはじめて可能となったのである。このような意味における「革命の必然性」が、「資本論」において設定された問題領域にふくまれなかったこと、あるいはふくみえなかったことは、当然である。そこで問題になっているのは、あるいは問題にすることができたのは経験的に確認しうる社会変革の必然性だけであり、「一種の自然過程の必然性をもって」³⁸⁾貫徹する「資本主義的所有から社会的所有への転化」³⁹⁾の必然性だけであつた。ただこのばあいにもマルクスは、共産主義的変革の必然性が歴史的必然性であるかぎりかならず「民衆」の革命的行動によってのみ現実化するものであることを忘れずに指摘して、ありうるいっさいの「自動崩壊論」にたいしてもみずからを区別したのである。

以上のことから、宇野氏が「(資本主義的)矛盾の発現の根拠そのものを解消することを目的とする運動」⁴⁰⁾とか「経済過程の外から加えられる政治的行動」⁴¹⁾とかの言葉で表現している「革命の必然性」を、「原理論」としての「資本論」のなかに(とりわけ、24章最終節のなかに)よみとったとすれば、そのことは氏の単純な「よみちがえ」というよりは、偏見というべきであろう。

<むすび>

「資本論」からその世界観的根拠と共産主義的帰結をはぎとって、これを「純粹論理」の自己完結的体系にしあげ、こうして「科学化」された「原理論」を共産主義的変革の実践に提供しようとする宇野氏の構想が、実生活によって拒否されることは、まったく確実である。ブルジョア社会の全体的変革が何によって必然とされるのか? 変革的实践が依拠すべき客観的と主体的条件はなにか? そもそも変革が共産主義的性格をおびるのは何故であるのか? 宇野氏によって構想された「原理」がこうした問題にたいする解答をふくまないとすれば、どうしてプロレタリアートをひきつけることができよう。このような「原理」は、せいぜい、ブルジョア社会の実生活とは無縁のすねかじりどもが手軽にふりまわしたり、わすれてしまったりするのは、都合のよい「玩具」ではある。

28), 30), 33), 34), 35) 同 23 卷, 995 ページを参照。

29) 前掲, 宇野論文, 7~8 ページ。

36) 同, 9 ページ 37)~39) 『資本論』, 全集, 23 卷, 995 ページを参照。

40), 41) 前掲, 宇野論文 10 ページ。